

65 当院における人工内耳手術のまとめ

リハビリテーション部・学院* 田内 光・小林美穂・大畑秀央・櫻井 梓・北 義子*

1. はじめに

現在多く用いられている多チャンネル人工内耳手術は、日本では1985年(昭和60年)に東京医科大学附属病院にて第1例が手術されて以来、2010年(平成22年)までに約7000例に行われてきた。当院にては1992年(平成4年)に第1例を行い現在までに20年経ち、計82例に手術を行ってきた。今回はそのまとめを症例も含めて報告する。

2. 当センターでの人工内耳手術の特徴

当院での最初の手術は上記のように1992年(平成4年)6月30日に39歳の男性に行った。第1例目は私にとっても初めての手術で、日本で最初に22チャンネル人工内耳手術を行った当時の東京医科大学教授の船坂宗太郎教授に来ていただき、教えを受けながら行った。非常に緊張する手術であり、また印象深い手術であったと覚えている。当院の人工内耳手術は日本で12番目に行った施設であり、またリハビリ中心の病院としては唯一の人工内耳手術を行う病院である。

当院での人工内耳の大きな特徴は、人工内耳手術からその調整(マッピング)そして小児においては言葉の訓練(聴覚学習)まで一貫して行えることである。このような施設は非常に少なく、この点が当院人工内耳手術の大きな特徴であると言える。現在までに合計82例に手術を行ったが、そのうちの59例(72%)が小児であり、小児の割合が多いことも特徴となっている。

3. 症例数と年齢分布

小児の人工内耳手術は最年少児が1歳10ヶ月であり最年長児が10歳、平均年齢は4歳であった。59例のうち、最も多い年代が2~4歳児でありその合計は38例で小児手術の64.4%をしめた。これは重度の難聴児の聴力閾値が確定するのがほぼその年齢であることによるものと考えられる。

成人の手術は18歳から74歳で平均年齢は54歳であった。この中には盲ろう者を含む視覚障害との重複障害者が4名含まれている。盲ろう者の人工内耳手術の効果は、視覚障害が先行し補聴器を十分活用していた人には非常に効果があるが、聴覚障害が先行し手話など視覚によるコミュニケーションを取ってきた人には効果が少なくなると言える。

4. 手術の合併症

人工内耳手術は比較的安全な手術と言われているが、可能性のある合併症はいくつかある。当院における合併症としては、顔面神経麻痺5例、術後のめまい3例、術後瘢痕形成・打撲によるインプラント故障がそれぞれ2例、創部離開・電極脱出がそれぞれ1例ずつであった。電極脱出以外の合併症は自然治癒や再手術等により解決している。

5. おわりに

人工内耳は手術も大事であるが、その後の人工内耳調整(マッピング)および言葉の訓練をする言語聴覚士の係わりが非常に重要な要素である。今後も人工内耳を発展させるには言語聴覚士部門の充実が必須と考えられる。